

事例報告②

資質・能力の育成に向けた10年の授業研究の歩み

～PISA型学力と探究力の育成をめざして～

報告者▶ 田中 昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）
池田 径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）



田中： 大阪府教育センター附属高校の田中です。どうぞよろしくお願いします。

（スライド1）ここに名前が二人ありますように、前半は田中が、後半は池田が本校の取り組みについて話をさせていただきます。

（スライド2）まず、学校の紹介ですが、本校は2011年に全国初の「教育センター」附属高校としてスタートしました。今年が10年目になります。（イ）ですが、本校にはミッションがあります。「大阪府教育センター」と連携し、大阪の新しい教育にいち早く取り組んで、ナビゲーションスクールとして「先導」と書いてありますが、それを大阪府全体に広めるという役割があります。（ロ）は、本校の目標ですが「PISA型学力」を実生活で課題を解決する力と考えて、社会に貢献できる生徒を育てることを目標に行っています。

本校には、いろいろな進路先があります。大学・短大でおよそ5割、専門学校・就職等で5

割という、いわゆるボリュームゾーンの生徒が来る学校です。そのため、高大接続というよりも、われわれは、社会に出て生き抜く力を育てたいという考えで行っています。その力の中心になるのが「探究」になります。

（スライド3）前半では、私から、学校全体で取り組む授業研究についてご説明させていただき、後半は探究のお話になります。まず、学校全体で取り組む授業研究の話をさせていただきます。

（スライド4）別紙1のほうが詳しいのですが、ここに簡単に、授業研究の取り組みをまとめています。2011年に開校したのですが、最初の2年間は前身の大和川高校との共存ということから、学校を挙げての取り組みはなかなか難しい時期でした。その間は、探究の基礎づくりとして取り組んでいました。2013年からは、学校全体で授業研究に取り組むため、授業研究委員会を発足させて取り組んでいました。1段目と3段目にあります文部科学省の調査研究事業を中心にして進めてきました。真ん中の2段目は「観点別学習状況評価の取組」という大阪府の取り組みで、2014年から3年計画でスタートして、それを大阪府全体に広めるという流れで行ってきました。2020年、本年度からは、一人1台PCを持つ環境における授業を考えるという「スマートスクール推進事業」です。令和4年度から入学してくる生徒がそのような環境で育つことになりますので、それを考え

るのがスマートスクール推進事業なのですが、本校もその協力校の1つとして取り組んでいます。

(スライド5) まず、2013年から2015年についてです。これは教育センターが受けた事業ですが、多様な学習成果の評価手法に関する調査研究で、評価が難しい多面的な資質・能力について、どのように評価したらよいのかということで授業研究を進めてきました。教育センターで、このように進めていったらよいのではないかと、Step 1、2、3で示していただきましたので、最初の3年間はそれに沿って行ってきました。まずは、アクティブ・ラーニングに取り組もうということです。その次に、パフォーマンス課題に取り組もう、そして、それをルーブリックで評価しようということで取り組みました。

(スライド6) 2016年から2018年は、その取り組んだものをベースにして、内容を充実させて、学びを深めようという取り組んだもので「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究」です。これは、大阪府が受けた事業で、研究校としては大阪府では本校だけの取り組みでした。1番目に、先ほど言いました、観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成について、3年間、取り組みました。それによって授業の目標・ねらいが明確になり、ルーブリックを示すことで、生徒も何を頑張ったらよいのが理解しやすくなったと思っています。2番目に、パフォーマンス課題について最初の3年間で取り組んだのですが、それをカリキュラムに位置付けて考えて行うのはどうだろうかということから「本質的な問い」からパフォーマンス課題を考えて、それを単元末の目標として各授業を組み立てていくという流れで進めていきました。例としては、ここにありますが「コミュニケーション英語Ⅰ」で、日本文化紹介のスピーチをするのに、まずは原稿を作成し、ペアで練習し、グループで練習し、その後、

クラスでスピーチするというようにステップアップしていきながら行うことで、前向きに頑張る生徒が増えていったかと思います。

(スライド7) これは授業アンケートの自己評価ですが、これに取り組むことによって、授業アンケートの評価も右肩上がりになっていった部分もあります。

(スライド8) これは、観点別学習評価のシラバスのひな形です。これは当時のもので、別紙(略)には本年度のものが載っています。

(スライド9) このときは4観点ですが、観点とその趣旨、その評価方法の具体例を書いていますので、生徒は非常に分かりやすいですよ。ね。「こんなふうに頑張ればいいのか」「こういうふうに評価してくれるのか」というのが分かるということです。

(スライド10) パフォーマンス課題についてです。本校はボリュームゾーンなので、どうしてもまず基礎学力という知識・技能に傾きがちですが、そうではなくて、やはりパフォーマンス課題をすることによって「思考力・判断力・表現力」、そして、その中で「主体性・協働性」も育まれるということで取り組んでいます。

(スライド11) 先ほどは、コミュニケーション英語Ⅰの例でしたが、数学Ⅰの場合は、このように少しずつ不等式の性質を学び、1次不等式の解き方を学び、文章から式を立てることを学び、それからパフォーマンス課題にいくという形式を取ることもあります。

(スライド12) これは、スピーチのルーブリックの例になります。

(スライド13) これは、数Ⅰのパフォーマンス課題をシラバスに位置付けるという部分で、このように単元末にパフォーマンス課題を設定し、それに向けて、例題で行って、その後、確認テストをして、定期考査に出すという流れです。度々パフォーマンスを行っているわけではないのですが、年間何本か単元末にこのように設定することで、年間の計画を立てることを

行っています。

(スライド14) そのようにして行ってきたのですが、やはり課題があって、なかなかうまくいかないところもあります。ベネッセの進路マップの成績が伸びなかったり、生徒は自分では勉強していると言うのですが、実際に調べてみると学習時間が少なかったりすることがあります。それでは、それをどのようにしたらよいのかということです。「課題依存型」、課題が与えられたら頑張れるが、自分で課題を見つけて取り組む部分が非常に弱いので、対策として「カリキュラムマネジメントの実践」と「メタ認知能力の育成」、この2つを課題対策として取り組んでみたらどうかと考えました。



(スライド15) I段階のものをII段階の「自己調整型の主体的学習」に行きたい、最終的には、社会に結び付くトランジションのところに行きたいと考えたのが、次のスライドの「クローバープラン」です。

(スライド16) これはそのカリキュラムマネジメントの部分です。黄色の部分の「確かな学力の育成」が一番のメインになるのですが、それだけではなくて、多方面からのアプローチが大事だろうということから、いろいろなところでつながりがあるのだと意識しながら教員も取り組むということを考えました。

(スライド17) それでは「メタ認知能力」はどうしたらよいのだろうかということです。「京都大学の教員養成ポートフォリオ」をヒン

トにさせてもらいました。これは、教科教育の教養と実践力、教科以外の教職に関する教養と実践力、そして課題探究力、この5つを柱にして京都大学で行っておられると本で読みまして、本校に当てはめたらどうなるのだろうかと考えたのが、このクローバープラン（ポートフォリオ）です。

(スライド18) 授業の学び、部活動・行事における学び、探究的な学び、進路学習の学び、この4つを頑張ることで、生徒に目標を持たせて高校生活を送るのはどうだろうかと考えました。この黄色とピンクの対角線の部分は昔ながらの文武両道の学びで、緑と青の対角線の部分はキャリア教育の学びというように、生徒に話をしているのですが、緑の探究的な学びで一般的なスキルを身に付けて、かつ青の部分で自分自身はどうするのかと考えさせることで取り组ませました。

(スライド19) この4つの学習や取り組み、その成果をクリアファイルにポートフォリオとしてストックしながら、自分で調整していく力を付けていき、それが社会で生きていく力に結び付けばよいと取り組んできました。

(スライド20、21) 本校の校章がクローバーなので「クローバープラン」と言っていますが、この4つの学びを四つ葉のクローバーに見立て、それをスライド16のクローバープラン（カリキュラムマネジメント）の真ん中に入れて「クローバープラン」として、取り組んでいます。

(スライド22) この「ICEモデル」は、ルーブリックを量から質へと考える部分なのですが、後半の「探究」で説明させていただきます。

(スライド23) 現在、2019年から2020年に、何を行っているかということ、1つ目に、カリキュラムマネジメントの校内研修で「学年別年間指導計画一覧表」をつくりました。別紙5が詳しいので、見ていただければと思います。全教

科の内容について何をするのか、一目見たら分かります。それに加えて、育てたい力も併せてそこに載せてあります。それをつくったのはよいが、まだまだ活用できていないので、どうにか活用したいと考えたのが、2つ目の「授業デザインシート」です。付けたい力と教員の生徒に伝えたいことを合わせて授業デザインを考え、授業実践していくことで、実現させようと考えました。3つ目は、今年から全国的にキャリア・パスポートが始まりましたので、先ほどのクローバープラン（ポートフォリオ）を本校のキャリア・パスポートとして行っております。そして、4つ目が、先ほど言いました、一人1台PCを使う授業を想定したスマートスクール推進事業の取り組みです。今、この4つを行っております。

（スライド 24～27）この辺は見にくいので、別紙（スライド 24、25 の学年別年間指導計画一覧表は別紙 5、スライド 26、27 の授業デザインシートは略）で確認していただければと思います。

（スライド 28）ちょうど昨日、校内研修として、全体の研究授業について研究協議を行いました。これが、その様子です。（スライドの画像は略）非常に活発な意見が出ました。実は私は今年で定年のため、来年から誰か引き継いでくれないかと思っていましたが、これだけたくさんの若い教員が頑張っているのを見て、安心だと思いました。

以上、前半は駆け足でしたが、このように8年間の取り組みをしてきました。ここから、後半の「探究」について、池田に変わります。

池田： 大阪府教育センター附属高等学校の指導教諭の池田径と申します。後半、よろしくお願ひします。

（スライド 29）実践編として、本校の柱の一つである「探究ナビ」の中身について、今からご紹介したいと思います。2014年に、一度、本

校の山元前首席がここで発表しているのですが、その後に私はこの学校に来ましたので「その後の話」でもあります。

（スライド 30）私は2017年に本校に着任したとき「探究ナビ」というのは、これからの教育に本当に必要な豊かな可能性のある内容だと感じました。私自身、大変勉強になると思いながら参加してきました。それは、山元首席のような非常に力のある教員と一緒に行っていて勉強になったというのもありますし、その後、若手の酒井将平先生という演劇教育にも優れた指導力を持つ方が行っておられるのを間近に見られたということもあり、非常に良かったです。一方で、全教員でそれにしっかり取り組むとなると、やはり負担感があり、実際には大変です。教員の入れ替わりもありますし、探究ナビで何をしていくのか、教員や生徒自身がそのことを通じてどのようになっていくのかということが共有されていない部分もあったかもしれないと思いました。机の上に生徒の落書きがあって「探究って何？って探究したい」と書いてありました。確かに、この授業を何のために、どうなるために行っているのかが分からない生徒もいるというところもありました。

（スライド 31）私としては、可能性も豊かですし、先達たちの遺産もたくさんありましたので、探究ナビにしっかり関わっていきたく思いました。そして、探究ナビを担当する・しないに関わらず、まずは、教員同士で何のために行っているのかを共有したいというのがありました。

（スライド 32、33）そこで「共通理解」と「実践力」についてです。これは、教員が4月当初に、研修で探究の授業について共通理解するためのピラミッドです。探究は「主体的・対話的で深い学び」を目指すこれからの教育を担う授業ですが、この頂上に持っていくためには、中段部分であるコミュニケーション、例えばグループワークなどもたくさんこなさないといけ

ません。しかし、本校は進路多様校であり、いろいろな生徒がいる中で「コミュニケーションをしてください」と言って、すぐ話し合いができるか、すぐ前向きに取り組めるかというところがあります。そのような中で、このピラミッドの中段に行くには、一番下のアイスブレイクをしっかりと行って、コミュニケーションへと誘わないと、なかなか難しかったり、形だけになったり、参加できない生徒が出てきたりします。そこで、教員は探究型授業で、この探究ピラミッドのそれぞれの段階をクリアするために、デザイナー、あるいはファシリテーター、あるいはアイスブレイカーとして関わっていきます。これは探究ナビだけではなくて、これからの教育に必要な力でもあること、また、このようなことが必要になってきている社会的背景のことも、研修で共通理解しました。

(スライド34) 実際にアイスブレイクをするときに何が大事かということ、生徒をコミュニケーションへと追い詰めないことが非常に重要です。生徒をコミュニケーションへと誘う、動機づけるために「コミュニケーションしなさい」「探究しなさい」と言われて「させられる」と生徒が受け取らないようにすることが大事です。そのために大切になるのが、アイスブレイクの観点です。探究型授業のために生徒がいるというのでは本末転倒になってくるので、生徒のために探究型授業を行うということを忘れてはいけません。教員の方が躍起になってしまったら、力の入れどころがおかしくなってきた、生徒もつらくなってしまうことがあります。

教員がアイスブレイカーやファシリテーターになるという場合、実際にどのようにしたらよいかという問題があります。これらの言葉を知っていても「分かった」と頭で理解して終わるのではなくて、実際に行ってみないと身に付かない部分があります。教員は言葉の理解はすぐにしてくれるのですが、実際に行うことが大

事です。そのため、教員研修自体をアイスブレイク型で行います。

(スライド35、36) 輪になって座り、実際に一緒にゲームを行って、アイスがブレイクしていく様子を体感し、どうしたらその方向にファシリテーションされていくのかということ、身をもって体験します。年に1回、全教職員で行うことで、教職員の集団づくりにもなり、実践力の向上にもつながるかと思い、私が来てからこのようなことをさせてもらうようになりました。

(スライド37) しかし、大事なことは、探究型授業について教員だけが共有していても良くて、先ほどの机の落書きではないですが、何のためにするのかを生徒にも共有してもらう必要があります。「意味が分からないことをさせられている」のではなく「意味が分かっていたくなる」ようにします。その意味や価値付けは、教員がしっかりしないといけないかと思っています。意味や価値を生徒自身に考えてもらうという方法もあるのですが、本校においては多様な生徒がいますので、今行っていることの意味や価値を教員がしっかり伝えることが大事かと思っています。

(スライド38～40) 最初のオリエンテーションの授業では、教員研修で行ったことと同じことを生徒にも言います。これからの教育で求められているのは何か、最終的にどこに行くのかという話もします。教育と探求社によるクエストカップにも参加して、付けた力を発揮する機会が用意されていることも伝えて、何のためにどのように取り組むのか、ゴールはどこかを示します。

(スライド41) 今までの学校教育では、与えられた、答えが決まっている課題を、一人で黙々と解いて、分からなければ先生が教えてくれるという形で、自学自習を重視していましたが、これからの社会では、課題を自ら見つけなければならない、答えも多様で、みんなで話し合

って解いていかなければならないのです。そのような課題について答えが分かっている先生はいないので、自分で答えを探しに行きます。ネットで調べるのも古いくらいで、ハッシュタグを付けてつながって、自分で情報を探します。これから協働・探究型の社会に出ていくので、社会の中で生き抜く力を身に付けるということで、探究型授業には意味があると思います。本校生徒は大学受験がゴールという者ばかりではないので、このようなところをしっかりと伝えていく必要があると思います。

(スライド 42)「学習指導要領が、こう変わったよ」というような話もします。しかも、新しい時代に必要となる資質・能力も、枕詞のところが非常に大事だと生徒に伝えます。知識・技能が生きて働いているか、未知の状況にきちんと対応できているか。学んだことを学校で完結するのではなくて、これからは社会の中で使っていける力を付けていくということに変わっていると伝えます。高校も、大学も、今、変わろうとしているということを生徒と共有して、探究ナビの授業に取り込んでいきます。

(スライド 43) 本校は創立以来 10 年間、探究ナビの授業に取り組んできた学校で、その生徒であるというように共通理解をしていくのです。

(スライド 44) この授業をどう評価するのかということで採用したのが、I C Eモデルです。酒井将平先生が土持ゲーリー先生や広島の前磨先生などの有名な先生を呼んできてくれて、研修を受けました。私の理解は浅いですが、このように「I」「C」「E」で、学びの質を問うていく、振り返って評価していくというものです。

(スライド 45) 実際に、第 1 回のガイダンスの授業の最後に生徒たちに、何を学んだのか、I C Eモデルで振り返ってみようと言います。探究ナビとはどんな授業かを説明したので「I (アイデア)」のところに書いてほしいと言

います。それは社会の変化とつながっているという話をしたので「C (つながり)」に、この探究授業がなぜ社会の変化とつながっているかを書いてほしいと言います。最後に、人生に応用できるかということだから、ここで学んだことが将来どのようなときに役立つと想定できるかを「E (応用)」に書いてほしいと言って、I C Eモデルによる振り返りの練習をさせて、この 3 年間のスタートを切るということになっています。



(スライド 46) 探究ナビは、1 年生のテーマが「人とつながる」で、2 年生は「社会とつながる」、3 年生は「未来を切り拓く」となっています。探究ナビ I を担当する私は「人とつながる」を具体化するために「コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる」ということを目指して、教案を組んでいます。先ほどの、ピラミッドの下から順番に行っていくことも生徒は理解しています。1 年生は、特に下の部分に力を入れるという形で行っています。

(スライド 47～51) I C Eモデルをきちんと使い切れているか自信はありませんが、このように、毎回の授業で生徒にそれぞれ学んだことを、振り返って書いてもらっています。

(スライド 52) 振り返りのときに、教育用語も生徒と共有したほうがよいと思っています。ポートフォリオやメタ認知という言葉が教員

の間ではたくさん出ているのですが、生徒自身にもこれらの言葉を教えて、きちんと教員と生徒の共通言語にしていきます。教員の側ばかりが分かっているても良くないと思います。生徒にポートフォリオという言葉はファイルと何が違うのかという話をします。

(スライド 53) メタ認知はどういうことかという話もします。

(スライド 54) 振り返るというのは、ポートフォリオをメタ認知することなのだということが、それがあるとどうなるのかということをお伝えします。何のために毎回の振り返りを行っているのかということを通して共通理解した上で、きちんと1学期全体を振り返ろうと言います。新しい教育用語も、生徒と共通のものにしていくということです。

(スライド 55～58) 1学期全体の振り返りで、生徒たちが「E（応用）」のところをどのように書くのかによって、学んだことをどのように応用できるのか、どのように身に付いたのかということを見ることができます。コミュニケーションが苦手だと言う生徒もいるのですが、人との関わり方が変わったと言って、自覚がある生徒もいました。他は見えていただければと思います。

(スライド 59) 2学期は、キャリア教育に取り組みますが、コミュニケーションの応用編という位置付けです。

(スライド 60～67) その振り返りで、一度このようなことをしたことがあります。仕事のことについてしっかり学んだことを「I（アイデア）」のところに書いてもらった後に「仕事と学校の勉強がつながっているとしたら、どうか。学校の勉強なんか将来役立たない、つながっていないって言う友達がいたら何と言う？」というように聞いたり「授業を受けている生徒に『何をしているのですか？』って聞いたら、生徒Aは『黒板を写しています』、生徒Bは『受験勉強しています』と答えましたが、最も意欲

が高い生徒Cなら、何と答える？」というように聞いてみたりしたのです。そうすると「させられている」じゃなくて、「したいから」という理由で進学したんじゃないの？それを役に立たないというのなら、自分がしたい職業についたとしても、何もできないよ」というように、その姿勢の問題などを友達に言ってあげると答えた生徒がいました。「役に立つか役立たないかじゃなくて、学校の勉強が社会の中でどんな役割を果たしているかを考えてみようよ」というように、メタ認知してみようということを書いたり「学んだ中身が直接、役に立たなくても、そこに関わる中で身に付けた力は役立つはずだ」というように書いたりする生徒がいました。自分がしていることの意味を、生徒自身が自分の言葉で一生懸命説明しようとしていれば、メタ認知が実践できているということです。お金や家は燃えたらなくなります。ただ、自分の勉強した知識は燃えません」「新しい学問を作るため」などと答えてくれた生徒もいました。この生徒のはよいですね。「将来どこかで、誰かのために役に立つと思って、たくさんのことを学びます」。教員は「勉強するのは自分のためだ。将来、通用しないぞ。自分のために勉強しなさい」ということをよく言いがちですが、この生徒は「勉強するのは世のため、人のためなのだ」と言うわけです。自分のことだから頑張れるという生徒も素敵です。澤井先生の発表は大変勉強になりましたから、私もまねしようと思ったのですが、他人事だから頑張れるということがあってもよいのではないかという気がします。このような考えこそ、大事にしてあげたいと思いました。

(スライド 68) そのようにして行っていく中で、将来、仕事に就くわけなので、仕事を調べて終わるのではなくて「仕事に就いている前提で職業説明会、就職説明会をする」という課題に取り組みます。

(スライド 69～73) モザイクをかけていま

すが、授業はこのような雰囲気です。今は、新型コロナウイルスの感染予防のため、ここまでできていないときもあります。これは昨年度ですが、このように探究ナビの授業を実際に行っています。教員がサポートして、生徒は当事者意識を持って、社会人として、自分事として説明するところです。ここは、先ほどの澤井先生のところと同じようなことかと思いました。

(スライド 74、75) 最後に、総仕上げで、演劇をしています。これは、コミュニケーション力の集大成という位置付けで行っています。文化祭と違って、台本も、音響も、衣装も、小道具も大道具も使わずに表現するという創作劇にチャレンジしてもらっています。あらすじだけあって、アドリブも入れながら、全部、自分たちでその場で表現していく劇にチャレンジしてもらっています。全員が舞台に立って、全員が出場します。苦手と言っている生徒にも、それぞれの持ち味を生かせる役をみんなが考えて、行ってくれている状況です。裏方はいません。

(スライド 76) このようなときにもやはり、なぜ行っているかを伝えます。「それぞれの存在を肯定し合おう。対話をしよう。そのために劇をやっているよ。ただの文化祭じゃないよ」と言っています。平田オリザさんの言葉もきちんと生徒に紹介して、会話と対話は違うという話をします。

(スライド 77) 応援しに来てくれている劇団員の方がいらっしゃるの、その方たちとも対話をします。「劇団の人に答えを聞くのではなく、対話してほしい」と言っています。また、教員と劇団員との対話のチャンスでもあります。外部を使うと、すぐに「お任せします」のような形になりがちですが、そこも対話なのです。私が「劇を楽しんでね」と言ったら、劇団員の方が後で「『楽しめ』と言っても、楽しめない人がいますよね」とおっしゃったことがあって「ああ、そうだな」と。劇団員の方に教え

てもらいました。私は、すぐ「楽しめ」と言ってしまうので、良くないと反省しました。その反省をすぐに生徒に伝え、楽しめないということも人間的な心理状態だから、演劇では大事だという話をしました。そのような対話の機会になって良かったと思いました。

(スライド 78) これで最後です。これまでは探究の授業を行っているだけで先進的・先導的というように言ってもらえたところもありましたが、実際には、非常に力のある先生方がしっかりとされてこられたからというところもありました。これからは、まさに中身が問われるのだろーと思っっています。そのときに、力のある教員が力技で行うのではなくて、体制でしっかりと行っていく、中身もしっかりとつくり上げて、しっかり残して、積み上げていけるようにしたいです。何をするか、1年後、そして3年後どうなっていくのかをみんなが共有できる状態で、教員が替わっても常にスタートできるようにしていく必要があります。一人1台PCを持つ環境を活用できるようにしたいと思っていますし、特に探究ナビⅢは今後どのように行っていこうか、今はクエストカップを主に行っていますが、2年生に下ろして、3年生の中身を変えようかとも思っています。澤井先生の学校で行っていたことが、とても素敵だと思っているので、そのようなことも取り入れていけたらと思っています。

ありがとうございました。

田中 昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）・池田 径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）

スライド1

発見・探究・感動・自信

資質・能力の育成に向けた
10年の授業研究の歩み
～PISA型学力と探究力
の育成をめざして～

大阪府教育センター附属高等学校
田中昌一・池田 径

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド2

発見・探究・感動・自信

大阪府教育センター附属高校とは？

2011年 全国初の「教育センター」附属高校
としてスタート

(イ)「大阪府教育センター」と連携し、
大阪の新しい教育にいち早く取り組む
ナビゲーションスクールとして、
大阪府の教育を先導する役割を持つ

(ロ)実生活で課題を解決する力「PISA型学力」
を育成し、社会に貢献できる生徒を育てる

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド3

発見・探究・感動・自信

本日のお話

(1)学校全体で取り組む授業研究

(2)「探究ナビ」の今
～2014年報告から、どう変わったか～

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド4

発見・探究・感動・自信

学校全体の授業研究の取組み

2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
多様な学習成果の評価手法に関する調査研究								
STEP1	STEP2	STEP3						
観点別学習状況評価の取組						スマートスク ル事業		
1年次必修科目 目シラバス作成	2年次必修科 目シラバス作成 1年次実践	限りの全科目シ ラバス作成 1、2年次実践	全科目で実践	全科目で実践 及び改善(PDC Aサイクル)			1人1台PC(タブ レット)環境にお ける授業の研究	
			基礎学力の定着に向けた調査研究			授業デザイン シートによる授 業実践		
			パフォーマンス 課題をシラバス に位置づける	クローバーブラ ン(カリキュラム シラバスとワーク シートの関係)	JOEモデルによ り学びを深める の開始	授業改善・学習 改善のPDCA サイクルの実践		

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド5

◎2013年度～2015年度

「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関す
る調査研究」(文部科学省)を授業研究の柱として、
3つのステップで、「評価が難しい多面的な資質・能力
についてその評価手法及び評価指標」について研究
し、授業改善に取り組んだ。その成果を活かす。

(Step1) 生徒主体の授業(アクティブ・ラーニング)に取り組む。

(Step2) 指導と評価の計画を意識し、パフォーマンス課題に取り組む。

(Step3) パフォーマンス課題の実践、ルーブリック(評価指標)づくりに取り組む

スライド6

◎2016年度～2018年度

「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のた
めの調査研究」(文部科学省)を柱とした取り組み

(1) 観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成と授業の実践

授業の目標・ねらいが明確になった。
(※) ルーブリックの活用も効果的に実施
⇒ 生徒には、何ができて何ができていないか、
何を頑張れば良いのかが理解しやすくなった。

(2) パフォーマンス課題をカリキュラムに位置づける(逆向き設計論)
「本質的な問い」から、パフォーマンス課題を考え、
それを単元末の目標として、各授業を組み立てていく。

例 コミュニケーション英語Ⅰ 日本文化紹介のスピーチ
・原稿作成 ・ペアで練習 ・グループで練習 ・クラスでスピーチ

➡ 前向きに頑張る生徒の増加

スライド7

(1) 観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成と授業の実践

授業の目標・ねらいが明確になった。

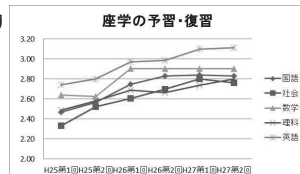
(※)ルーブリックの活用も効果的に実施

⇒ 生徒には、何ができて何ができていないか、何を頑張れば良いのかが理解しやすくなった。

(2) パフォーマンス課題をカリキュラムに位置づける(逆向き設計論)
「本質的な問い」から、パフォーマンス課題を考え、それを単元末の目標として、各授業を組み立てていく。

前向きに頑張る生徒の増加

授業アンケートの結果より (4)あてはまる ～(1)あてはまらない の平均値の推移



スライド 8

(例) 観点別学習状況評価に基づくシラバスの難型(当時)

平成27年度 ○○ 県立 ○○ 高等学校

※学習が修められたこともでも修得目標をしよう！

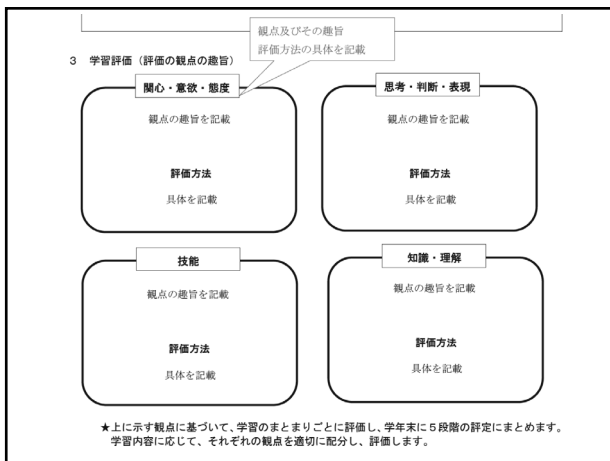
4. 学習プログラム (学年学習計画書)

A. 達成した B. 継続達成した C. 課題を履修した D. 多くの課題を履修した

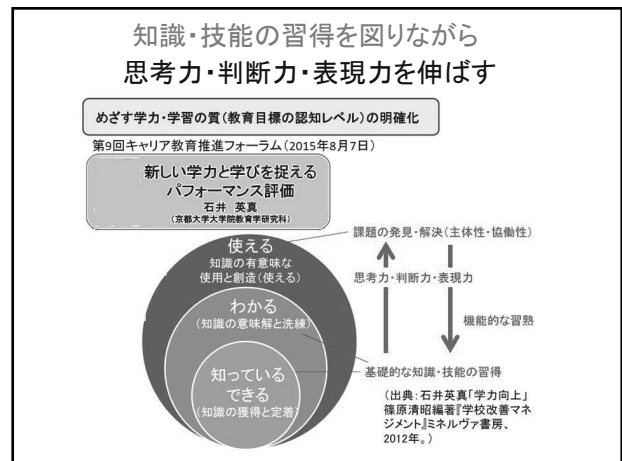
学年	学習項目	学習内容	到達目標	達成状況				
				評定	実	達	履	修
1 学年	基礎科目	国語	現代文の読解力 古文をよめる。					
2 学年	基礎科目	国語	現代文の読解力 古文をよめる。					
3 学年	基礎科目	国語	現代文の読解力 古文をよめる。					

※達成状況の記入は、学習内容ごとに○×□△を記入する。
 ○：修得の程度が最も高い
 □：修得の程度がやや高い
 △：修得の程度がやや低い
 ×：修得の程度が低い

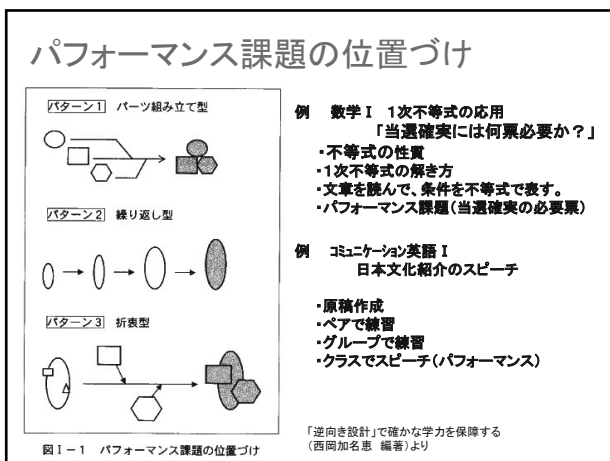
スライド 9



スライド 10



スライド 11



スライド 12

(例)「英語のスピーチ」のルーブリック			
スピーチの評価基準			
観点	A:十分満足できる	B:おおむね満足できる	C:努力を要する
発音	・よく聞こえる明瞭な発声で話している ・意味を理解する上で問題となるような発音の間違いがない。	・教室全体どこにおいても聞こえるような声でスピーチしている。 ・どこどころ発音の間違いはあるが、ないよう理解の妨げになることはない。	・ほとんど聞こえないか、教室の位置により、よく聞こえないことがある。 ・発音の間違いが多く、内容の理解を妨げることがある。
話しぶり	・聴衆にまっせんく視線を送りながら、語りかけるように話している。 ・適宜、ジェスチャーも交えながら話している。	・主に聴衆の方を向いて話している。 ・ときおりジェスチャーを交えている。	・まったく前を見える様子がない。 ・ほとんどジェスチャーがない。
暗記の程度	・まったくかほとんど、詳細を見ずに話している。	・時々原稿を見ながら話している。	・ずっと原稿を見ており、文章を読むような状態になっている。
内容	・説明がはっきりしてて日本文化について容易にイメージできる。 ・スピーチの中に印象に残る部分があり、聞いた後、詳細に思い出せる。	・説明がある程度ははっきりしており、日本文化について理解することができる。 ・スピーチを聞いた後に、少なくとも一部分は思い出せることができる。	・日本文化についての説明がわかりにくい。 ・印象に残る部分がない。

スライド 13

(例) 数Ⅰ「逆向き設計」論 パフォーマンス課題のシラサへの位置づけ

	4月	5月	中旬	6月	6月	期末	7月	8月	9月	10月	中旬
学習項目	数と式	関数		1次不等式・2次関数		2次関数		2次関数	2次関数	2次関数	
パフォーマンス 範囲				適立1次不等式					2次関数の最大・最小		
例題				どろどろたつぷりな パナソニックを 作成するにあたって パナソニックの本数					たい焼きの売り上げ 金額の最大・最小		
課題テキスト				ヘルプメニュー パナソニックを 作成するにあたって パナソニックの本数					焼きおにぎりの 売り上げ金額の 最大値		
定規や定規器						時限部のボールの 入り数後の範囲					ミニクワッパンの 売り上げ金額の 最大値
科目の目標 つけたたい方	「数と式」「2次関数」「関数と計算」「データの分析」について理解し、各単元の基礎的な知識と技能の習得を確 定し、それらを応用してパフォーマンス課題を学習し、パフォーマンス課題に学習する意欲を育て、数学のよさを認識し、さら にそれらを応用する態度を育てる。										

10月	11月	12月	期末	1月	2月	期末
2次不等式	三角比			正数範囲・命題範囲		
2次不等式				定数範囲 命題範囲		
モンパランの 販売開始日範囲				川にかける 橋の長さの決定		
シュークリームの販 売開始後の範囲				川にかける 橋の長さの決定		
				X'mask'一本 の製造開始後の 範囲		
					川にかける 橋の長さの決定	

スライド 14

◎見えてきた課題から、新しい計画へ

【課題】

与えられた課題に対しては、前向きに取り組めるが、自ら課題を見つけ、計画的に取り組む力が弱い。

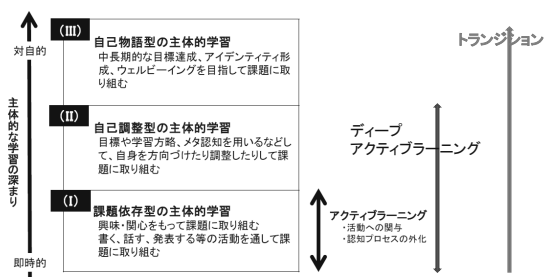
- ・ベネッセ進路マップの成績の伸び悩み
- ・家庭学習時間が少ない

【対策】 課題依存型の主体的な学び
⇒ 自己調整型の主体的な学びへ

「メタ認知能力の育成」
「カリキュラムマネジメントの実践」

スライド 15

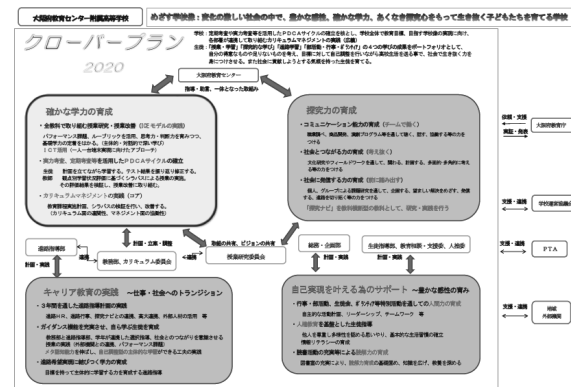
課題依存型⇒自己調整型 $\wedge((I) \rightarrow (II))$



2015/8/8高校教育フォーラム 溝上慎一先生(当時・京都大学)講演資料より

スライド 16

(3) クローバープラン



スライド 17

メタ認知能力を育成するには？
ヒントは、「京都大学の教員養成ポートフォリオ」

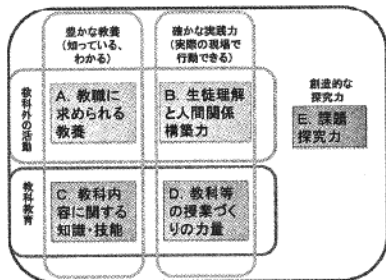


図3-2 教師に求められる力量の5つの柱

『アクティブラーニングの評価(松下佳代・石井英真編)』の石井先生の記述より

スライド 18

クローバープラン

授業の学び・学力向上の取組み

- ・授業による成果 授業における成果
- ・実力テストや基礎学力テストにおける成果
- ・英検、数検定、漢検等の成果

探究的な学び

- ・「探究ナビ」における成果
 - ・探究で学んだ事を活かした成果等
- (例)「課題研究」による成果
演劇の手法を活かした研究発表

進路学習、
将来の目標に向けた取り組み

- 進路HR等で学んだ事を活かした成果等
例「教師にまっすぐ」、大学公開講座参加
府庁内インターンシップ参加 等

部活動・行事等における学び

- ・部活動・行事、生徒会活動、ボランティア活動等
- 例 大会、コンテスト、コンクール等の成果、成績

クローバープラン

- この4つの学習や取組みを、高校3年間を通して行い、その成果をクリアファイルにポートフォリオとしてストックしながら、目標を持った高校生活を送る。
- 将来の目標を考え、自分が今何をすべきか、何が自分に足りないかを考え、自己調整をする。(メタ認知能力)
- このような高校生活を通して、社会で生き抜く力を身につける。

生徒のクローバープラン

(3) クローバープラン

大阪府教育センター 附属高等学校

めざす学習目標： 社会の新しい社会の中で、豊かな感情、豊かな学力、豊かな意欲を持って生き抜く子どもたちを育てる学校

2020

(4) 「ICEモデル」により、学びを深める

(1) 基礎、事実、個々のスキルなど、一つひとつのアイデアの理解

(2) 知っていることと新しいアイデアを関連づける／2つ以上ある別々のアイデアをつなげて理解することができる

(3) 知っていることから今までにない状況を推定する／結果を予測したり、仮定する／学んだことの意味合いを理解する／仮説を立てる／新しい課題に対応する

教育センター附属高校校内研修資料より
(京都情報大学院大学・土持ゲリー法一先生(当時帝京大学))

◎2019年度～2020年度

(1)「学年別年間指導計画一覧表」を作成。
3年間の学習の流れを把握し、目標をふまえ、教科等横断的な視点で、その目標達成に向けた教育内容を組織的に配列する。

(2)「生徒の力を伸ばす授業デザインシート」を作成、実践・教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。

(3)生徒の主体性を伸ばす為に、ポートフォリオを活用。
(クローバープランをキャリア・パスポートとして実践する。)

(4)1人1台PC(タブレット)を使った授業を想定し、ICTを効果的に活用した指導方法や授業デザインについて、実践・研究。
(スマートスクール推進事業(大阪府))

(1)「学年別年間指導計画一覧表」のイメージ

平成30年度 学年別年間指導計画一覧表(1年)

学年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1年	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成
2年	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成
3年	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成	基礎学力の育成

スライド 25

授業計画	第1期（10月～12月）の授業計画（10月～12月）				第2期（1月～3月）の授業計画（1月～3月）				第3期（4月～6月）の授業計画（4月～6月）			
	科目名	単元名	単元内容	単元目標	科目名	単元名	単元内容	単元目標	科目名	単元名	単元内容	単元目標
第1期	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得
第2期	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得
第3期	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得	国語	現代文	現代文の基礎知識・技能の習得	現代文の基礎知識・技能の習得

スライド 26

(2)「生徒の力を伸ばす授業デザインシート」のひな型

生徒の力を伸ばす授業デザインシート

教科：	科目：	担当者：
授業日時	月 日 ()	限目
受講者	年 組 (選択等)	名
特徴・ニーズ		
1. この科目、この単元等において、生徒に育成したい力		
2. 生徒に担当者から伝えたいこと		
3. 「1×2」をふまえて、この単元等を通した授業デザイン		

スライド 27

4. 本時はどんな回、目標（ねらい）、工夫の見どころ	
5. 本時の評価の観点、及び評価方法	

スライド 28

昨日12／4(金)は授業研究の校内研修でした		
11月授業公開月間の「全体研究授業」の研究協議 ～「授業デザインシート」に基づく2つの研究授業 (そのうち一つは、スマートスクール推進事業の研究授業として、1人1台タブレットを用いた授業)		
教科	地理・公民	外国語
科目	地理B	コミュニケーション英語II
担当者(授業者)		
この単元等を通した授業デザイン	・「対話」と「協働」の推進、相互理解を促す。 ・生徒たちが日常生活を営んでいる「都市」の理解を深め、問題意識を育む。 ・「都市」の理解を深め、問題意識を育む。	
本時はどんな回、目標（ねらい）、工夫の見どころ	① 対話・協働の推進、相互理解を促す。 ② 対話・協働の推進、相互理解を促す。 ③ 対話・協働の推進、相互理解を促す。	
研究授業実施予定日時 予定クラス	11月20日(金) 5限(1-2) 6限(3-4) 地理B選択 講義室D	11月11日(水) 1限 3年5組H R教室

スライド 29

発見・探究・感動・自信 本日のお話 (1)学校全体で取り組む授業研究 (2)「探究ナビ」の今 ～2014年報告からどう変わったか～	
	

スライド 30

2017年度～本校着任 着任して感じたこと 「探究ナビ」 ・可能性の豊かさ ・課題の多さ	

スライド 31

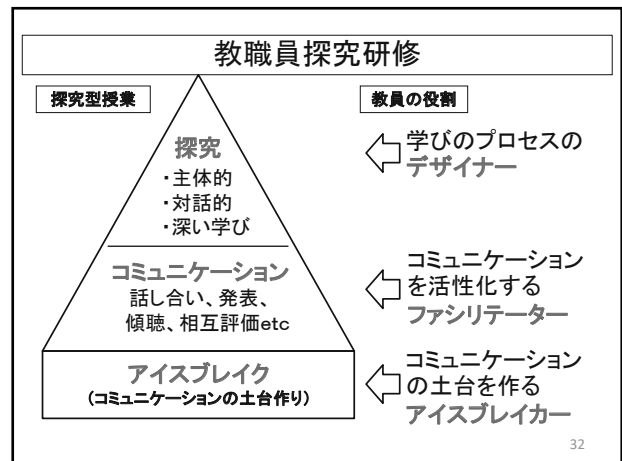
なぜ「探究」なのか

教育の今日的課題を 教員と共有する

共通理解＋実践力

31

スライド 32



スライド 33

～なぜアイスブレイクなのか～

- ①コミュニケーションツールの発達による
コミュニケーション能力の低下
(例) イエデンとスマホ、電話が苦手な新入社員
- ②社会のコミュニケーション化による
コミュニケーションからの撤退
(例) 自称コミュ障、伊達マスク、ぼっち席

現在、学問領域のみならず多くの分野で「コミュニケーション的転回」が進行しています。(中略)それは「人と人が何らかの合意に至ろうとして話し合ったり共に行動したりすることが、多くの分野や場所で重要な意味を持つようになった」ということです。
高田明典『現代思想のコミュニケーション的展開』(筑摩書房、2011年)。

- ③クラス内のポジショニングの問題
(例) スクールカースト、キャラ設定、“優しい関係”

土井隆義『友だち地獄―空気を読む世代のサバイバル』(ちくま新書、2008年)。

33

スライド 34

～アイスブレイクで大切なこと～

- ①生徒をコミュニケーションへと追い詰めない
→生徒をコミュニケーションへと動機づける
- ②生徒のために探究型授業がある
→探究型授業のために
生徒がいるのではない

※良きアイスブレイカー＆ファシリテーターになるために
アタマで理解する ⇨ ココロとカラダも使って体験する
(動いて感じて理解する)

34

スライド 35



スライド 36



スライド 37

なぜ「探究」なのか
教育の今日的課題を
生徒と共有する
意味＋動機
※教員による
意味づけ、価値づけ

37

スライド 38

探究ナビ I 第1回



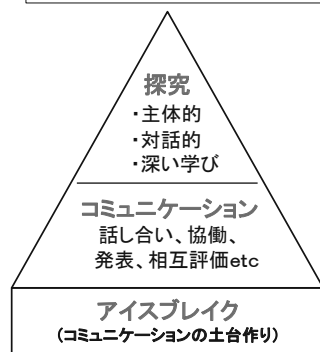
ーオリエンテーションー

探究の授業について、社会の変化
や自己の将来と関連付けて理解し、
他者に説明することができる。

38

スライド 39

探究ナビとはどんな授業か



本校生徒は全員
週1回、2時限連続の
「探究ナビ」を
3年間受け続けます！

探究ナビ I (1年生)

＝人とつながる

探究ナビ II (2年生)

＝社会とつながる

探究ナビ III (3年生)

＝自己の未来を切り拓く

スライド 40

探究ナビとはどんな授業か

先輩たちが「探究ナビⅢ」で取り組んできたこと
クエストカップby教育と探求社

＝実在の企業が出すミッションに合う
商品・サービスをクエスト(探究)し、
プレゼンテーションする

2年前から参加し、
2年連続全国大会出場！

⇒全国大会2019の様子をご覧ください。

スライド 41

なぜ探究ナビなのか①学校と社会のギャップ

	学校 小・中・高・大学	社会 第4次産業革命、ソサエティ5.0、 超スマート社会etc
どんな課題 が出るか	与えられた課題 答えが決まっている課題	→自ら見つけた課題 →答えが多様な課題
誰と解くか	ひとりで	→みんな
解いている 間は	黙っている	→話し合う・学び合う
分からない ときは	先生が教えてくれる	→分かる人を探して聞く →現場に行って調べる
参考等	教科書・資料集 (インターネットを見る)	→インターネットで聞く →インターネットでつながる
課題解決 の形式	自学自習型	→協働・探究型

41

スライド 42

なぜ探究ナビなのか②新学習指導要領

～新しい時代に必要となる資質・能力～

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

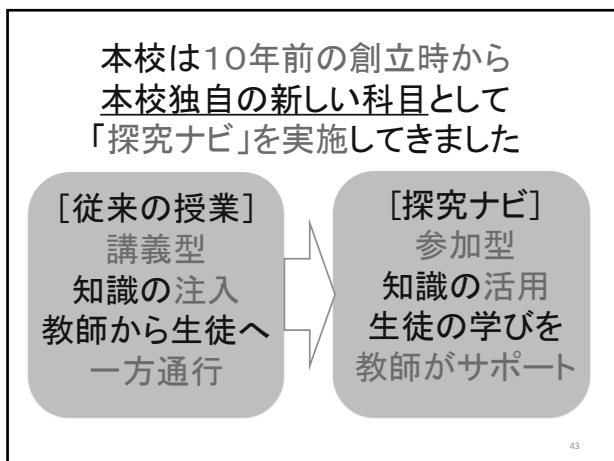
未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

⇒高校側：授業改革(主体的、対話的で深い学び)

⇒大学側：入試改革(多面的総合的選抜の実現)

42

スライド 43



スライド 44

探究では「振り返り」が重要です！

ICEモデルで評価

Ideas (I) : アイデア
＝基礎的な知識や技術の学び

Connections (C) : つながり
＝基礎的な知識や技術どうしのつながりを課題や作業を通じて理解する学び

Extensions (E) : 応用
＝自らの体験や生活に結び付けた知の応用、新しい価値を生み出す学び

スライド 45

今回の「振り返り」をしてみよう！

今回の振り返り
探究ナビはどのような授業なのか、社会の変化や自己の将来と関連付けて説明しなさい。

今回のICEルーブリック

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
探究ナビ	探究ナビの授業内容について理解している。	探究ナビの授業内容について、社会の変化と関連付けて説明できる。	探究ナビの授業内容が、自己の将来において役立つ場面を具体的に想定できる。

スライド 46

探究ナビ I

(1) テーマ「人とつながる」
※探究ナビII「社会とつながる」、探究ナビIII「未来を切り拓く」
→コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる。

(2) コンテンツ

1学期

① **アイスブレイク** (クラス開きHR)
※名前や言葉が持つ力とその使い方

② **チームビルディング**
※目標を共有することでチームになれる素晴らしさと怖さ

③ **コミュニケーション I**
※ノンバーバル、イエスアンドIメッセージ、コンセンサス

- ・防災(災害シミュレーションゲーム)
- ・夏休みの宿題(フィールドワーク&プレゼンテーション)

スライド 47

探究ナビ I 2学期第1回

－ 振り返りの重要性 －

学びの記録(ポートフォリオ)を作成し、自分の学びを自分で振り返る(メタ認知する)ことで、自分の学びを自覚し、定着させ、自己の成長につなげる。

47

スライド 48

第2回授業「探究とアイスブレイク」

I: アイスブレイクとは何ですか。

C: なぜアイスブレイクを探究の授業で行うのか。
アイスブレイクが探究の授業に必要な理由を説明しなさい。

E: アイスブレイクのやり方を学ぶと、実生活のどんな場面でどんな風に役立てられますか。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
アイスブレイク	アイスブレイクについて理解している。	アイスブレイクと探究の授業の関連性について説明できる。	アイスブレイクを実生活の具体的な場面で役立てることを想定できる。

スライド 49

第3回授業「人間関係作りと集団作り」

I: 人間関係作りや集団作りを促進したり、チームワークを高めたりするためには、どのようなことをすれば良いか、説明しなさい。

C: 仲間作りが仲間はずれ作りにつながる例を、自分の体験や社会の事例と結びつけて説明しなさい。

E: 以下の状況で、あなたならどのように言いますか。今日の授業を踏まえてセリフの形で答えなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
人間関係作りと集団作り	人間関係作りや集団作りを促進する要素について、自分の言葉で説明できる。	仲間作りが仲間はずれ作りにつながる例を、自分の体験や社会の事例に当てはめて説明できる。	異質なもののや少数派を排除しない集団づくりのために、自分のできることを考え、周囲に働きかけることができる。

スライド 50

第4回授業「発信と受信、バーバルとノンバーバル」

I: ノンバーバル・コミュニケーションの重要性(影響力)について、説明しなさい。ただし、説明の中に必ず「メラビアン法則」という用語を入れること。

C: 相手のメッセージを受け止めるためには、どうすることが大事になりますか。今日のゲームや聴くワークで分かったこととつなげて、具体的に説明しなさい。

E: 現代の社会でカウンセラーという職業が存在し、人々に必要とされているのはなぜだと思いますか。あなたの考えを書きなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
コミュニケーション	ノンバーバル・コミュニケーションの重要性(影響力)について、学んだ知識を使って自分の言葉で説明できる。	メッセージを受け止めるときに大事になることを、自分の体験や学びとつなげて具体的に説明できる。	現代の社会で受け止めることを専門にする職業が存在し、人々に必要とされている理由を分析できる。

スライド 51

第5回授業「つなげて返して合意する」

I: 相手を否定せずに自分の意見を返す(言う)方法には、どんなもの(言い方)がありますか。具体的に説明しなさい。

C: グループで話し合っ合意を取る時、なるべくメンバー全員が納得するにはどうすれば良いですか。今日の体験とつなげて具体的に説明しなさい。

E: 日常生活で、お互いに「もう話したくない」と感じて、関係が断絶しそうになる時、コミュニケーションの面から見ると、その2人にはどんな問題が生じていると考えられますか。考えられるコミュニケーション上の問題点の指摘と、改善方法の提案をしなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
つなげて返して合意する	相手を否定せずに自分の意見を返す(主張する)方法を具体的に説明できる。	グループで話し合っ合意を取る時に、メンバー全員が納得するにはどうすれば良いか、自分の体験とつなげて説明できる。	日常生活で、両者の間のコミュニケーションに断絶が生じる時、そこに想定されるコミュニケーション上の問題点を指摘し、それに対する改善策を提案できる。

スライド 52

振り返りの重要性①ポートフォリオ

Portafoglio (伊) → Portfolio (英)

- ・Porta = 「運ぶ」 } 書類を運びながら
- ・Foglio = 「紙」 } 出し入れできるケース



ポートフォリオ
= 「学びの記録」を残し、生徒が自らの学びのプロセスを振り返って、評価するためのもの

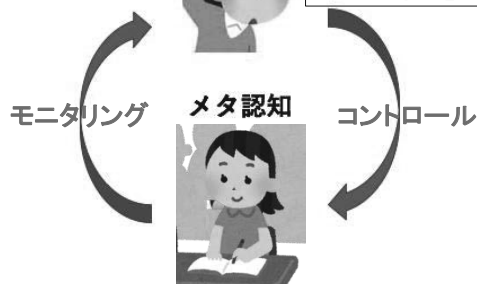
52

スライド 53

振り返りの重要性②メタ認知

メタ(meta)
= 1つ上の視点から

メタ認知
= 自分で自分を見る
= 自分の学びを自覚する



53

スライド 54

振り返りの重要性 まとめ

振り返る

- = ポートフォリオをメタ認知する!
- = 自分の学びの記録を自分で見て自分の学びを自覚する!

振り返り ➡ 学びの自覚 (定着・応用) ➡ 自己の成長

1学期全体の授業内容を振り返ろう!

54

スライド 55

2学期第1回「振り返りの重要性」

I: 1学期の授業内容で最も印象に残っているものをひとつ選び、理由を書きなさい。

C: 1学期の授業全体を通して、総合的に考えると、あなたにとって最も重要な学びや気づきは何だったと思いますか。

E: 1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
振り返り	1学期の授業内容から最も印象に残っているものを選び、理由を説明できる。	1学期の授業全体を振り返り、自らの学びや気づきを総合的に説明できる。	1学期の学びが自己の生き方(考え方・行動)にもたらした影響や変化を分析できる。

スライド 56

2学期第1回振り返り用紙より

E: 1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

私は1学期に探究の授業をして人との関わり方が変わったなと思いました。人と話す時は微笑むなど考えるようになりました。昔は愛想がまったくなかったからです。もう一つ変わったことは周りをよく見ることです。周りをよく見て気づける人間になろうと思ったからです。

スライド 57

2学期第1回振り返り用紙より

E: 1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

この授業を受ける前は、クラスになじめるかどうかが心配だったり、あまり他の子に自分から話にいたりしなかったのですが、この授業で人との関わり方を学んで、前よりも自分から話しかけたりするようになったと思います。

スライド 58

2学期第1回振り返り用紙より

E: 1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

集団で話している時に会話に入れていない子がいたら、今まで以上に気にかけるようになった。こんな風に言っても大丈夫かなと相手のことをよく考えるようになった。

スライド 59

2学期

④コミュニケーションⅡ
※アンガーマネジメント、ピアメディエーション

⑤キャリア教育(コミュニケーション応用)
※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ
※社会人(当事者)に成りきって就職説明会を実施

スライド 60

探究ナビ I 2学期第5回



一適性検査と職業調べ

適性検査の結果に基づいて、適性のある職業について調べるとともに、様々な職業についても広く知り、働く意味を考える。

スライド 61

2学期第5回「適性検査と職業調べ」

I: 今回調べた仕事の中からひとつ選び、その仕事の内容ややりがい、その仕事に就くためにやっておくべきこと等の情報をまとめて紹介して下さい。

C: 仕事(働くこと)と学問(学ぶこと)は関連していることを踏まえた上で、「学校の勉強なんて将来役に立たない」という友人に、そうではないことを説得力のある言葉で伝えて下さい。

E: 授業を受けている高校生に「あなたは何をしていますか」と聞いたところ、生徒Aは「先生が黒板に書いたものをノートに写しています。」と答え、生徒Bは「進学するのに必要なので勉強しています。」と答えました。最も意欲の高い生徒Cなら、何と答えるでしょう。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
適性と職業	仕事について調べ、得た情報をまとめて提示することができる。	仕事と学問の関連について、説得力のある内容で表現できる。	意味を深く考えることが意欲の高さを支えることを、日常生活で創造的に活用できる。

スライド 62

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

学校の勉強は“させられてる”じゃなくて、“したいから”という理由で進学したんじゃないの？それを役に立たないというのなら、自分がしたい職業についたとしても、何もできないよ。

スライド 63

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

将来に役立つか役立たないかじゃなくて、学校の勉強が社会の中でどんな役割を果たしているか考えてみようよ。

スライド 64

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

確かに直接役に立つことは少ないかもしれないね。でも、考え方とか調べ方、人と話し合って物事を解決することができる力が身につけてるはずだよ。それは将来、人と過ごしていく上で、すごく大事なことだよ。

スライド 65

2学期第5回振り返り用紙より

E: 生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？

お金や家は燃えたらなくなります。ただ、自分の勉強した知識は消えません。知識が一番の財産であり、その財産を蓄えています。

スライド 66

2学期第5回振り返り用紙より

E: 生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？

私が新しい学問を作り、後世に残したいから、勉強をしています。

スライド 67

2学期第5回振り返り用紙より

E:生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？」

将来どこかで、誰かのために役に立つと思って、たくさんのことを学んでいます。

67

スライド 68

就職説明会について

チームで仕事をひとつ選び、その仕事をしている社会人に成りきって、学生向けの就職説明会を開催する。

仕事内容、年収などの労働条件、やりがいをプレゼンテーションする

今回は各チーム模造紙1枚、持ち時間5分以内で実施する。

生徒同士でプレゼン評価をする。

68

スライド 69

「探究ナビⅠ」授業風景



スライド 70

iPadも活用してグループワーク



スライド 71

生徒の学びを教員がサポート



スライド 72

就職説明会



スライド 73



スライド 74

2学期

④コミュニケーションⅡ

※アンガーマネジメント、ピアメディエーション

⑤キャリア教育(コミュニケーション応用)

※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ

※社会人(当事者)に成りきって就職説明会を実施

⑥劇作り(コミュニケーション総合)

※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない

創作劇を上演

3学期

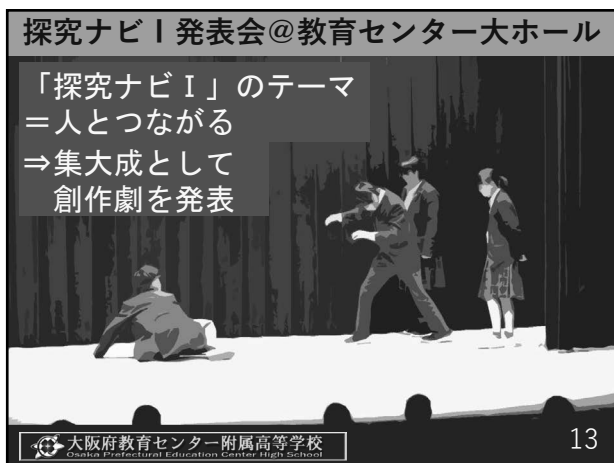
・創作劇のクラス発表会

・クラス代表班の発表会

(教育センター大ホール)



スライド 75



スライド 76

劇作りについて

「存在の肯定」をしあいながら、
「対話」を重ねて物語を作り、上演する。

※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない。

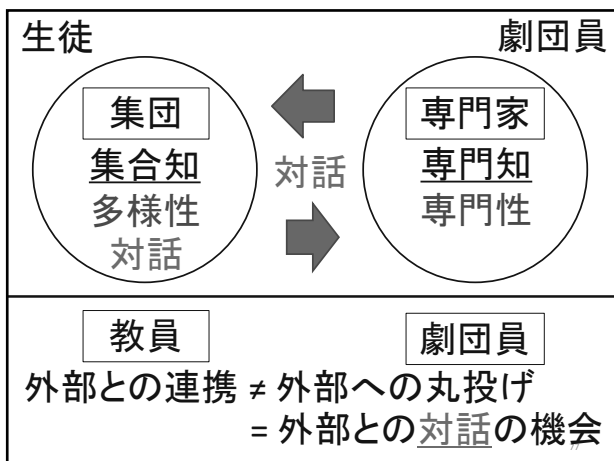
会話は価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。

「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺(す)りあわせり、Cという新しい概念を生み出す。AもBも変わる。まずはじめに、いずれにしても、両者とも変わるのだということを前提にして話を始める。

平田オリザ『わかりあえないことから』(講談社現代新書、2012年)

76

スライド 77



スライド 78

「探究2.0」へ

これまでは探究の授業を
やっている＝先進的先導的

→これからはその中身が問われる

今後の課題

- ・探究に取り組む体制の充実
- ・1人1台タブレットのさらなる活用
- ・探究ナビⅢの内容再編

78

資質・能力の育成に向けた 10 年の授業研究の歩み
～PISA 型学力と探究力の育成をめざして～

大阪府教育センター附属高等学校 田中 昌一
池田 径

1. 学校全体で取り組む授業研究

(1) 取り組みの概要

2013 年度より始まった授業研究は、文部科学省の 2 つの調査研究事業「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究」を通して、授業実践と検証を行ってきた。

(2) 2013 年度～2015 年度 高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究（文科省）

(3) 2016 年度～2018 年度 高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究（文科省）

・観点別学習状況評価の取り組み

シラバスや定期考査を観点別で考える中で、教員は生徒につけたい力をより具体的に考える事ができるようになり、生徒も目標を具体的に捉えられるようになったが、総括的評価よりも、形成的評価として進めてきた。

・パフォーマンス課題をカリキュラムに位置付ける（逆向き設計論）

その単元で身につけてほしい力を考え、パフォーマンス課題を設定し、それを目標として、それまでに丁寧な授業を行って「知識・技能」の定着をはかる形が、見えてきた。

・2 つのクローバープラン（カリキュラムマネジメントとポートフォリオ）

それぞれの部署での取り組みを、めざす学校像に向け、連携して進める事の大切さを意識してもらう為にまとめ、カリキュラムマネジメントの研修を行った。

ポートフォリオを使った指導は、「メタ認知能力」「自己調整能力」を伸ばし、主体的に学ぶ生徒を育てるのがねらいで、学年進行で始めた。

・「ICE モデル」により、学びを深める

ルーブリックの質の改善をねらいとし、「探究ナビ」で活用していた ICE モデルの考え方を、すべての教科に広げる為、研修を実施し、学校全体で共有できるようになった。

(4) 2019 年度～2020 年度 授業改善、学習改善の P D C A サイクルの実践

・「学年別年間指導計画一覧表」（カリキュラムマネジメントの研修の成果物を活用）

3 年間の学習の流れが見える化（視覚化）し、学年の目標・育てたい力、教科・科目のつけたい力をふまえ、教科横断的な視点で、その目標達成に向けた教育内容を組織的に配列し、改善する計画。

→ つけたい力を意識し、授業改善に活かす

・「生徒の力を伸ばす授業デザインシート」～教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。

「生徒につけたい力」と「各担当者の思い」を掛け合わせ、新たな「授業デザイン」を作成し、授業実践。

（※）その中で、1 人 1 台 P C を使った授業を想定した「授業デザイン」にもチャレンジ
（スマートスクール推進事業（大阪府））

・クローバープラン（ポートフォリオ）をキャリア・パスポートとして実践する。

2. 「探究ナビ」の今

(1) 理念を広く実践に落とし込む

・教員との共有 教職員研修（探究研修）

探究ナビⅠ、Ⅱ、Ⅲの第1回授業をアイスブレイク（クラス開き HR）とし、その内容を「いじめ防止プログラム」の一環に位置づけて全教職員で共有。その際に、探究型授業の構造とファシリテーションのスキルについて共通理解し、クラス開き HR を体験する形で実践力を養う。

・生徒との共有 探究ナビオリエンテーション

探究型授業が求められる社会的背景、新学習指導要領の中身、探究型授業の特徴を理解し、振り返りを評価する ICE モデルを知る。

(2) 新しい教育用語を共通言語にする

・ポートフォリオやメタ認知について学び、振り返り時に実践する。

(3) 探究ナビの目標を具体化する

・探究ナビⅠ「人とつながる」、探究ナビⅡ「社会とつながる」、探究ナビⅢ「未来を切り拓く」

・探究ナビⅠ「人とつながる」

＝コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる。

コンテンツ

①アイスブレイク（クラス開きHR）

※名前や言葉が持つ力とその使い方

②チームビルディング

※目標を共有することでチームになれる素晴らしさと怖さ

③コミュニケーションⅠ

※ノンバーバル、イエスアンドとⅠメッセージ、コンセンサス

④コミュニケーションⅡ

※アンガーマネジメント、ピアメディエーション

⑤キャリア教育（コミュニケーション応用）

※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ

※社会人（当事者）に成りきって就職説明会を実施

⑥劇作り（コミュニケーション総合）

※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない創作劇を上演

※劇団員との対話

(4) 今後の課題

- ・探究に取り組む体制の充実
- ・1人1台タブレットのさらなる活用
- ・探究ナビⅢの内容再編

(別紙1) 大阪府教育センター附属高校におけるこれまでの授業研究の取組みの概要

年度		各年度の目標(調査研究のSTEP)		授業研究委員会の具体的な取組		
2011	共存時代 大和川高校					
2012						
2013	C 附属・学校全体の取組スタート	多様な学習成果の評価手法に関する調査研究	STEP1 生徒主体の授業(アクティブ・ラーニング)に取り組む	授業研究委員会の設置 第1, 2回校内研修(C附属の授業スタンダード確立に向けて) →授業観察シート作成 11月授業研究月間(研究授業の実施と相互見学) 第3回校内研修(全体研究授業(探究ナビ)の研究協議)		
2014			STEP2 指導と評価の計画を意識し、パフォーマンス課題に取り組む。	観点別学習状況評価の取組	1年次必修科目 シラバス作成	第1回校内研修(観点別学習状況評価について学ぶ ワークショップ(生徒向けのシラバスを考える)) →シラバスの雛型を作成 第2回校内研修(各教科のALの共有 11月授業研究月間に向けて) 11月授業研究月間(観点別学習状況評価を意識した授業に取組む、各教科の研究授業) 第3回校内研修(全体研究授業(数学・英語)の研究協議) 第4回校内研修 (各教科のシラバス説明、各教科研究授業の報告と共有)
2015			STEP3 パフォーマンス課題の実践、ルーブリック(評価指標)づくりに取り組む		2年次必修科目 シラバス作成 1年次実践	第1回校内研修(観点別学習状況評価の学習会 ～観点別学習状況評価に基づく定期考査の作成及び返却について) →定期考査振り回りカードの作成(形成的評価がねらい) 6月教科授業研究月間(各教科研究授業と相互見学) 第2回校内研修(6月教科授業研究月間の総括) 8月教育課程協議会(各教科観点別学習状況評価の取組の発表) 11月授業研究月間(各教科のSTEP3の研究授業と3年間の総括) 第3回校内研修(全体研究授業(社会・理科・探究)の研究協議)
2016		基礎学力の定着に向けた調査研究	カリキュラムマネジメントを考え、パフォーマンス課題をシラバスに位置づける	残りの全科目 シラバス作成 1, 2年次実践	第1回校内研修(各教科3年間の取組の発表と本年度の計画発表、基礎学力の調査研究の説明) 6月初任者研修・研究授業実施 第2回校内研修(講演「アクティブに学ぶ」) 11月授業研究月間 (パフォーマンス課題に取り組む 各教科の研究授業) 第3回校内研修(全体研究授業(社会・理科)の研究協議) 第4回校内研修(講演「新しい学力と学力評価について」)	
2017			「カリキュラムマネジメントの実践」と「生徒のメタ認知能力を伸ばすポートフォリオの指導」の2つのクローバープランをもとに取り組む。	全科目で実践	第1回校内研修(附属高校におけるカリキュラムマネジメント) 6月教科授業研究月間(めざす学校像をふまえた教科目標をもとに教科で工夫をし、相互見学) 第2回校内研修(続カリキュラムマネジメント・実践編) 11月授業研究月間(『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業～エビデンスに基づく調査研究の実践) 第3回校内研修(全体研究授業(数学・理科・英語)の研究協議)	
2018			「クローバープラン」の継続。 「ICEモデル」をもとにルーブリックの質の改善。 「基礎学力の定着」に向けたPDCAサイクルの構築。	実践の継続及び改善(PDCAサイクル)	第1回校内研修(ICEモデル入門編) 第2回校内研修(ICEモデル実践編) 6月教科授業研究月間(教科で決めたテーマにそった取組みの実践。その検証を11月研究授業、総括へつなげる。) 第3回校内研修(Japan-e-portfolio) 第4回校内研修(6月実践の発表・共有、11月授業研究月間に向けて) 11月授業研究月間(「基礎学力の定着に向けてPDCAサイクルの構築に向けた授業実践と検証」→調査研究の総括へ) 第5回校内研修(全体研究授業(国語・社会・数学)の研究協議)	
2019		「クローバープラン」の継続。 授業改善、学習改善の為にPDCAサイクルの実践。 「教科内研修」の実施	PDCAサイクルの実践 (教科の自主性の尊重と全体での共有)	6月教科授業研究月間(教科テーマに基づくPDCAサイクルの実践。「年間指導計画」の「各科目のつきたい力」を意識した授業実践。) 第1回校内研修(「カリキュラムマネジメント」(その3) PDCAサイクル確立に向け、生徒の「今」を考える。) 11月授業研究月間(6月のテーマに再チャレンジ。「各科目のつきたい力」を意識した授業実践、各教科の取り組みを全体で共有。) 第2回校内研修(全体研究授業(社会・芸術)の研究協議)		
2020		スマートスクール推進事業	(1)教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。 (2)生徒の主体性を伸ばす為に、ポートフォリオを活用を継続。	・全員が「生徒の力を伸ばす授業デザインシート」を作成、授業実践 ・クローバープランをキャリア・パスポートとして実践 ・1人1台PC環境における授業の研究	第1回校内研修(ロイロノートに触ってみよう。) 第2回校内研修(オンライン授業について) 第3回校内研修(ロイロノート授業実践発表。授業デザインシートについて情報交換、共有) 11月授業公開月間(授業デザインシートに基づく授業実践。1人1台タブレット環境における各教科の研究授業。) 第4回校内研修(全体研究授業(社会・英語)の研究協議)	

別紙5

45